

木曾川文庫

# 木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。  
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、  
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。  
今回は木曾三川河口に開けた桑名市から、  
水運の歴史や都市整備構想を中心に、  
河川交通第二編では、  
長良川の水運を特集します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《桑名市》  
水陸の要衝として発展した、桑名市

AREA REPORT  
歴史に見る桑名の都市整備事業

気ままにJOURNEY  
伝統と文化の町桑名、四百年の歴史を歩く

歴史ドキュメント  
長良川水系における水運の展開

TALK&TALK  
近代長良川水系における申請積換湊となった小熊野湊

民話の小箱  
平群池の不思議な伝説



# 水陸の要衝として発展した桑名市

が土着してそれぞれの土地の名を名字に名乗っていました。ちなみに、貞衡の孫清綱は桑名氏の始祖。その末裔たちは海賊征伐などで殊勲をたっています。

## 港灣都市桑名は水陸の拠点

桑名が港町として名を馳せるようになったのは中世の頃。日本の三問丸の一つに数えられるようになり、問丸とは元来荘園の年貢米を保管したり、販売したり、海運したりした荘官の一種で、土地の富豪がこれに当たるのが多く、主な業務は海運でした。その後荘園制の崩壊とともに、荘園領主から独立して手広く営業し、取扱商品によって、米問・材木問・紙問等の問屋に分化していきました。

問丸の以前は津屋と称するものが海運を司っていました。津屋とは中世の湊に置かれた管理倉庫をさし、地名となったもの。桑名にも吉津屋、七ツ屋の旧名が残っています。この地名から見られるように、桑名は津屋、問丸、問屋等から発展した港灣都市として、古代中世を一貫してきたことが推定できます。

桑名の水運の中心を占めていたのは、伊勢神宮の年貢米と木曾木材です。桑名付近や美濃には伊勢神宮の領地が多くあり、そこから集められる年貢米は木曾三川を川舟で桑名へ運ばれ、海を渡る大形舟に積み替えられて伊勢の大湊まで運搬されました。運宮に必要な木曾材も筏に組んで木曾川を桑名まで送られ、舟に積み込むか筏を曳航して伊勢まで運ばれました。しかし、陸路がなかったわけではなく、近江の商人は八風峠や千草峠を越えて往来していました。桑名には近江商人や美濃商人の定宿があり、中継地としても大きな位置を占めていました。

## 自由都市桑名の繁栄

室町時代の桑名では、財力をもった商人達による共同自治が行なわれおり、十楽の津と呼ばれた自由湊でした。十楽とは仏教の言葉で極楽のような意味。権力支配を受けた独占体制の座に属さず、誰でも自由に商売ができる

緑豊かな鈴鹿連峰を背後に控え、木曾・長良・揖斐川の三大川の豊かな水に恵まれた桑名の地は、古代より水運を中心に開けてきました。中世に誕生した十楽の津は、まさに自由港灣都市のさきがけ。河川交通・海上交通・陸上交通を結ぶ要衝の地として、発展を遂げてきました。東海道宿駅制定・桑名開府四百年にあたる今年は、「くわなルネッサンス」を実施。さまざまな記念事業が開催されています。



## 桑名のあけぼの

熱田の宮から海路で七里。古くから港町として街道沿いの宿場町として成長を遂げた桑名市は、木曾川・長良川・揖斐川の豊かな水に恵まれたデルタ地帯です。

桑名の名の由来は、天照大神が鳥に化身して降臨し桑の木に止まった所からとされたとか、桑の木が多く植えてあった所からとつけられたとか、さまざまの説がありますが、おそらくは桑名一帯を支配していた豪族、桑名首の名にちなんでいるようです。西部丘陵地にある高塚山古墳は北勢地方でも有数の大規模な前

方後円墳で、桑名首の墳墓であろうといわれています。

桑名が初めて文献に記されたのは「日本書紀」です。壬申の乱(六七二)の際、桑名へ立ち寄った天武天皇は戦勝祈願のため七里の渡から熱田の宮へ向けて出港。この時、余りに遠いことから「間遠の渡し」と称されたようです。



天武天皇が滞在したと伝承される、天武天皇社

## 伊勢平氏の発祥

一〇〜一二世紀にかけて、平氏は伊勢国と深い関わりをもち基盤を形成しました。伊勢平氏の主な拠点は、安濃津(津)、富津(多度周辺)、桑名の三箇所でした。もともと瀬戸内海を制し熊野海賊と呼ばれた水軍を擁していた平氏は、水運にもかなり力を注いでおり、伊勢国においても同様に伊勢の良港である安濃津、木曾・長良・揖斐の三天川の河口にあり水路の要衝である桑名、尾張へ渡る要所である富津を支配下に置くことで勢力を伸ばしていき、これらの地域には平貞衡の子孫たち

桑名市空撮



都市でした。

しかし桑名が港湾都市として経済的に発展してくと、付近の封建領主は黙視しておらず、桑名へ侵入し税金を徴収しようとした。永正七年(一五二〇)には、津地方に勢力をもっていた長野氏が兵を率いて征伐を加えてきました。これに対して桑名衆は逃散をもてこれに対抗。武力では到底勝算はなかったからです。

その結果、桑名の問丸に依存していた宮廷・神宮・本願寺等は、年貢米が集まらなくなったので、大変困ったようです。結局、伊勢神宮は長野氏に交渉し事件は一件落着いています。

このよつな十楽の津としての繁栄も、戦国時代の織田信長の侵攻により崩壊し、中世桑名に創建された多くの寺院も長島一向一揆のときの兵火で焼失しています。

### 海道の名城、扇城

信長に敗北した後は滝川一益の支配下になり、豊臣秀吉の時代には、織田信雄、豊臣秀次を領主に桑名には代官が置かれました。江戸時代に入り、徳川四天王の一人と称された本多忠勝が領主になると、戦国時代に東城があった所に桑名城を築城しました。また、慶長六年(一六〇一)には、慶長の町割を実施。現在の桑名市街の原形はこの時整備されたものです。

忠勝により築城された桑名城は、元和四年(一六一八)松平定勝移封後、現在の吉の丸を増築。寛永二二年(一六四五)松平定綱就封の後、河口東門の櫓より外朝日丸、吉の丸南角まで海面へ突き出し、暫時修築を加えて、海道の名城と称せられるようになりました。桑名城の別名は扇城。その昔中国には、九華扇と呼ばれた扇子があり、桑名城もその美しい

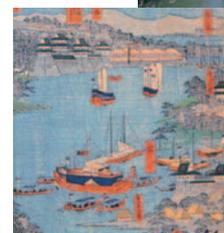


本多忠勝銅像  
(吉之丸コミュニティパーク)



桑名城壁と外堀

扇のように広がっていることからこう呼ばれていました。しかし、元禄一四年(一七〇一)の火災により天守閣が



白須賀 - 桑名  
(東海道五十三次図会)

### 水駅を兼ねた桑名の宿



伊勢国一の鳥居

桑名の街は延宝七年(一六七九)には武家屋敷約八百軒、町家二千軒、人口役二万二千人を擁する都市でした。三大河川は沿岸に水禍をもたらし、半面、この三川を利用して桑名は、商業・交通の要地として発展しました。慶長六年(一六〇一)には東海道の四二番目の宿駅として指定され、宮宿、熱田(海上)「七里の渡」の渡船場となり、水駅をも兼ねる宿駅でした。渡し場には舟の出入りを監視する、舟番所や渡舟の手配をする、舟会所などが置かれました。また、伊勢神宮の大鳥居・高札なども設けられていました。この鳥居は伊勢神宮の鳥居を移築したもので、江戸から伊勢国に入って最初に有る鳥居という意味で、伊勢国一の鳥居と呼ばれており、遷宮ごとに立て替えられています。

港湾都市桑名の隆盛は中世をしのぐ勢いで発展し、米・木材・塩などの物資の中継地点として大いにきわみをみせ、また宿駅の宿数は東海道中、宮宿に次いで第一位を誇りました。

### 新田開発と治水事業

古くから新田開発は徐々に進展していましたが、江戸時代に入ると産業振興を目的に開墾や治水事業に力を注ぐようになりました。桑名藩主の松平定綱も同様に新田開発に力を注ぎ、員弁郡笠田村に笠田池を拓き、笠田新田を開墾するとともに水路も整備しています。また、桑名の加治清左衛門も定綱の命を受けて山郷村に平野新田を開墾。私財を投じて水路を開いています。文政六年(一八二三)までに、三崎新田・蟬塚新田・赤須賀新田など数多くの村々が誕生しています。しかしその一方で河川の氾濫による被害は大きく、その度に新田をはじめ田畑が流失したり荒廃し、慶長四年(一五九九)宝暦三年(一七五三)に至る一五五年間に八〇回も水害に見舞われています。そのため今島村では六年毎に田畑の割替が行なわれていました。これが、株地割と呼ばれる田畑の共有化による扶助制度でした。三大川の治水対策としては宝暦四年に宝暦治水が実施されました。薩摩藩によるこの大規模な御手伝普請は多大な犠牲を払って竣じ、しかし、治水工事で降も水害は続発し、天明二年(一七八一)六月七月には三度の洪水を被り、農民は年貢の減免を要求して天明農民一揆を起しています。次いで文政六年(一八一三)にも農民一揆が発生しています。

### 茶人に愛された萬古焼



古萬古

初代藩主本多忠勝は都市整備を断行するとともに、商工業者を集め、その協力を得て繁栄を計ることを城下経営の第一義としました。そのため鑄物師・瓦師・陶工などには住宅を提供し、苗字帯刀を許すなどの特典を与えて、主要な商工業を保護奨励しました。町割の際、商人町でも同業の多く集まった町には、油町・紺屋町・鍛冶町・鍋屋町などの町名が生まれ、瓦師の定住した瓦師口、鑄物師が雑居した鍋屋世古などが誕生しています。

桑名を代表する萬古焼も江戸中期に桑名の豪商沼波弄山によって始められたもの。茶道や絵画に秀でた弄山は、赤や緑を使った異国情緒豊かな焼き物を作り、萬古不易の故事を引用して、萬古焼と命名しました。異国情緒に満ちた萬古焼は江戸でも大流行し、將軍家御用も務めました。弄山のもは以後の萬古と区別して、古萬古と呼ばれています。

### 交通網の整備とともに成長

明治の幕開けとともに文明開化の風が吹き始めると、それまでに育まれてきた産業が一斉に花開きました。中でも鑄物は全国でも有数の産地として知られるようになり、独自の新技术も生み出しました。その一方、全国的な紡績業勃興の波に呼応して、旧士族・地元資本家による桑名紡績が設立され、桑名城跡に工場を建設。大正三年には東洋紡績となり、桑名を代表する産業となりました。

水陸の要衝として繁栄を遂げた桑名港は、三大川の河口部にあるため大型船の入港ができず、西洋型蒸気船の普及とともに機能が低下。代わって、国鉄や地方私鉄などの陸上交通が普及しました。昭和に入ると江戸期以来の東海道の代わり、新国道現在の国道一号が開通。さらに尾張大橋、伊勢大橋が完成して、三大川を越えて初めて愛知県と結ばれました。

昭和三年には現在の桑名市が誕生。こうした交通網の整備を背景に、大山田団地などの大規模な住宅団地が完成し、名古屋近郊のベッドタウンとして、また人口二〇万人を擁する東海地方の中核都市として発展を遂げています。

特に今年には、東海道宿駅制定・桑名開府四百年の記念事業として、平成のまちづくりくわなるネットワークを実施。市民・企業・行政の協同のもとさまざまなイベントが開催されています。

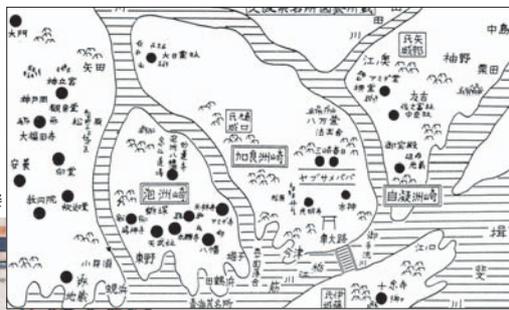
#### 参考文献

- 『桑名市勢要覽』 平成九年桑名市
- 『桑名市史』 本編昭和三四年桑名市
- 『角川地名大事典三重県』 角川書店

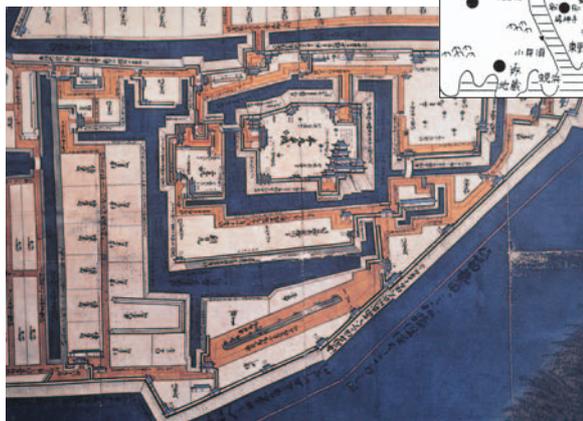
# 歴史に見る桑名の都市整備事業

## 本多忠勝の都市整備事業

二二世紀の幕開けである今年、桑名市は徳川家康が行なった東海道宿駅制定と初代藩主本多忠勝が行なった慶長の町割・着手からちょうど四百年を迎えました。慶長六年（一六〇一）、まさに桑名の府が開かれ、都市計画が行なわれた訳です。この大規模な都市構想は約五〇年の歳月をかけて完成しました。



町割以前の桑名の姿



慶長の町割

町割を断行した本多忠勝は徳川四天王の一人と称された猛将。関ヶ原の合戦で軍監として徳川軍を指揮し、その功により桑名一〇万石が与えられました。桑名城主就任とともにスタートさせたのが慶長の町割です。大規模な市街地を誕生させるために忠勝は、町の中心を流れていた大山田川と町屋川の流れを大きく変えることから始めました。桑名の西部で流れが三つに分れていた町屋川は三つの洲を形成していましたが、これを埋め立てることで広大な市街地を確保し、大山田川も同様に埋め立て、二川の以前の流れは外堀に利用しました。また、城郭の外に寺院を集めて防衛の拠点の一つとし、さらに見附や木戸を設けて人馬の往来を監視しました。さらに東海道を街の中に開通させました。

「慶長日記」によれば、慶長六年六月、浄土寺を三崎に移転。同月一八日には普請を開始し、舟入堀を築造。九月六日には、町中の家や蔵を壊し、春日神社境内や川に筏を浮かべてその上に小屋を建てて町衆を收容したと記されています。この不便な生活は二年に及んだといわれており、大半の市民は「すべて都市整備に協力したものの、不便な生活を強いられた一部の市民は、影口を叩いたとも伝えられています。前述の文献によれば、桑名城は伊勢湾に臨んで水陸要害の様相を呈し、武家屋敷は城下を中心に三之丸・内堀・外堀から新屋敷にまで広がっていました。一方、町屋敷は三之丸以西の春日神社付近に集中し、南北に社寺を集めています。

この町づくりには一部の反対者はいたものの多くの町衆が協力し、藩主といっしょにならな堀を掘り、事業は進められました。町の中心部は概ね三年で形成されましたが、町並み全部

現在の桑名市の原形は、一六〇一年、本多忠勝が着手した都市計画により形成されたもの。こうした大規模な都市整備構想は、その後、上水道整備として桑名藩主松平定行や明治の豪商諸戸清六に受け継がれ、昭和初期に至るまで、市民の台所を潤っていました。そして現在は、桑名城・七里の渡周辺で大規模な高潮堤防補強工事を実施。城下町の景観を生かした治水事業が行なわれています。

川と町屋川の流れを大きく変えることから始めました。桑名の西部で流れが三つに分れていた町屋川は三つの洲を形成していましたが、これを埋め立てることで広大な市街地を確保し、大山田川も同様に埋め立て、二川の以前の流れは外堀に利用しました。また、城郭の外に寺院を集めて防衛の拠点の一つとし、さらに見附や木戸を設けて人馬の往来を監視しました。さらに東海道を街の中に開通させました。

体の整備にはほぼ五〇年の歳月を擁し、この形状は現在も残されています。

## 町屋御用水の整備



町屋川と取水口

桑名市街の西部丘陵地は砂利交じりの赤土からなり、市街地及びその付近一帯の平坦地は、かつて海だった所に木曾・長良・揖斐川の泥砂が堆積して形成された低地で洪水被害の絶えない湿潤の地でした。このため古くから井戸の水質はきわめて悪く、飲料水となる純良な井戸は稀でした。したがってこの地には「水売」といって商売も成り立ち、大山田川や町屋川の水が販売されていました。本多忠勝とその子忠政の二代にわたる町割にも上水道施設の構想はあつたでしょうが実現が遅れ、それを具現化したのは次いで来封した松平定勝の嫡子定行です。

寛永三年（一六二六）、吉津屋御門より町屋川水源まで約千間の間に堀を開削して水道を造り、御門より町内へは地下に水路を通じ、所どころに水汲井戸を設けて住民の飲み水とし

ました。これが町屋御用水の概要です。松平定行は桑名に二一年在城した後、伊予の松山に移封されましたが、松山においても上水道を整備しており、まさに名君であつたといえましよう。

## 私財を投じた諸戸水道

江戸初期に整備された町屋御用水は住民を潤す飲料水として活躍しましたが、その一方で汚物の流入や汚水の浸透、雨水による汚濁を免れず、衛生的な見地からみれば不完全なもの。疫病や眼病の原因ともなっていました。殖産興業に励む明治時代に入ると、衛生的な水道建設が計画されましたが当時の町財政では完成の見込みがたらず、ついには断念放棄されるにいたります。

この窮状に立ち上がったのが、桑名の富豪諸戸清六です。明治三年（一八九九）には水源の調査に着手しました。水源の候補地は桑名市西部の丘陵地小野山付近から旧大山田村一帯。古来水質良好な地であるといつこと



町屋御用水（現在は農業用水）



諸戸水道貯水池遺構

ています。その結果、小野山の愛宕山の湧水が最も水質が良く飲料水にも適していることが明らかになり、この地を水源とすることを決定しました。そしてまず清六は、水源地と太一丸の自邸との間、約二十町余りに鑄鉄管を敷設して自家用の水道を通じ、これを町内に開放して自由に使用させました。

清六はさらに全町民に水道を提供すべく一般使用の水量の獲得を目的に、新しい水源の

調査を開始。苦難の末、小野山西方に水源を確保しました。以後、敷設した水道のトンネル内には人工石土管を埋めて側壁を固め、その一方で湧水を集めるための空継ぎ土管を伏せること、配水池を設けること、鉄管を敷くことなど、多様な設備を整え、明治三十七年にはいかに竣工。街頭給水栓を町中五五箇所に設け、一般市民に無料で開放しています。この上水道開設は東海地方で最初の快挙であり、全国七

番目という大事業でした。

諸戸清六は水道が竣工した翌々年の明治三九年に永眠していますが、清六が遺した水道設備は大正一三年（一九二四）、故人の遺志と後継者の厚意により当時の桑名町に寄付されました。

上水道に要した経費は巨額に上りましたが、清六はこころよく私財を投じたばかりではなく、建設途中の障害に際しても私費を投じ

て解決しています。その障害とは、坑道掘削による田水の枯渇など、こうした苦情に対し、その周辺一帯の田地を買い取るなどで対処。また、鉄管の敷設にあたって発生する堤防の横断などにもそれぞれ相当な設備または橋梁の付加工事を要した箇所も少なくありませんでした。そのほか、有形無形の困難を克服して工事をまとうさせています。

## 桑名城・七里の渡周辺の高潮堤防整備

### 桑名市吉之丸地区 高潮整備計画のあらまし



城下町情緒を残す桑名市では、以前から地盤沈下が深刻な問題となっており、高潮等の水害から沿岸住民の暮らしや安全を守る堤防の整備が急務です。その際、桑名のまちの風情を損なうことなく、周囲の環境と調和し、河川空間と一体になった総合公園として、良好な地区生活環境を形成することへの配慮が重要な課題となっています。そこで以下の四点を留意して計画を進めます。

#### ・歴史的風情の保全

史跡・隅樽付近の石垣については旧観の保全に留意し、新堤防については石垣のイメージを創造し、城址の風情を保つよう配慮します。

#### ・史跡の保全

県指定史跡の七里の渡については、東海道の歴史においてとりわけ名高い史跡としての価値を存続させるため、その機能と眺望を配慮して前面に水面を確保します。また、堤防に必要な修景を施しつつ、可能な限り旧観を保全した構造とします。

#### ・環境・景観に配慮

旅館街に面した堤防については、環境・景観に配慮した修景を施します。特に天端と現

パレットとの間の空間は、植栽などを施して整備します。

#### ・機能の維持

住吉神社は初日の出参拝の名所となっており、この景観を損なわないよう、神社境内は堤防天端まで高上げします。また、水辺へのアプローチ等の機能を確保し、浦としての機能を可能な限り維持する構造として整備します。

#### 景観に溶け込む水門の改築

水門改築にあたっては、景観に配慮した形式にすることが最も重視されます。このため、水門構造形式を決定づけることとなるゲート形式を検討しました。

- ・住吉水門と住吉樋管の一体構造。
- ・修景配慮のための門柱がない形。
- ・櫓風の水門操作室。
- ・水門を堤防天端から突き出させない。
- ・門扉、開閉部分を極力抑え陸側及び川側からの眺めを疎外しないように配置する。

ゲートは河川管理として要求される信頼性操作性を有し、安全性を確保する。以上の点を配慮し、三つの水門を改築します。

#### ・三之丸水門（スイングゲート）

ゲートは全開時には水路上を覆う構造となります。確実な開閉、通舟の安全性確保、経済性の優れたスイングゲート。ゲートは一枚の扉で開閉します。



三之丸水門完成イメージ図

#### ・川口水門（マイタゲート）

七里の渡に着岸点であり、伊勢神宮一の鳥居の前面にある水門なので、解放性を重視し、全開時に障害物を残さない構造です。ゲートが左右に二枚の扉で開閉します。



川口水門完成イメージ図

#### ・住吉水門（ライジングセクタゲート）

ゲートは半円形のゲートが上から回転して降りる構造となっています。



住吉水門完成イメージ図

#### 参考文献

『桑名市中』 通史編 補編 桑名市

# 伝統と文化の町桑名、 四百年の歴史を歩く

白いカモメが町屋川の川面をかすめるように飛んでいく。桑名城の石垣を残す外堀は、在りし日の城下町を物言わず語りかけてくる。遠くに聞える潮騒は、歴史の営みを伝えているのだろうか。桑名は伝統と文化に熟成された町。そんな四百年の歴史を歩いてみよう。

## 記念すべき四百年に湧く桑名

新世紀への助走を始めた二〇〇一年は、桑名市にとって記念すべき年。桑名開府・東海道宿駅制定四百年と、東海道の宿駅として城下町として文化や産業を熟成させてきた桑名に



イギリスのジョサイア・コンドルが建築した六華苑

歴史の道案内人会長、加藤勝己さんと薩摩徳利



海蔵寺の倉から発見された「一礼之事」

としては、ずしりと伝統の重みを感じる年でもあり、さらに未来へ伝えていくとする、市民総意を確

認する年でもあるのでしう。四百年を記念する市民

参加のイベントは盛沢山。そんな白熱する雰囲気の中で、桑名市のポフティエアグルプ、歴史の道案内人の会長を務める加藤勝己さんもまた、江戸時代の東海道沿いに、道しるべの「のほり」を四百年設置するなど、フル回転、そんな多忙な日々を縫って、今回、東海道の史跡・名勝を案内していただきました。

## 平田靱負を祀る海蔵寺

「桑名を語るのなら、まずここでしょう」とエッセイしてくれたのが、海蔵寺。江戸中期、近世史上まれに見る大事業・玉磨治水を成し遂げながらも、数多くの犠牲者と薩摩藩に多額な資金を負わせたことから、非業の死を遂げた薩摩藩総奉行平田靱負と薩摩義士を祀る墓所です。木曾三川流域民にとっては治水の恩人である平田靱負ら薩摩義士も、幕府に抗議して切腹をしたいわば罪人。その墓を提

寺を訪ねた所、快く了承されました。その顛末を記した「薩摩義士古証文」は明治時代の住職が倉の中で発見したという貴重な資料。その古文書と大きな酒徳利を、加藤さんが私たちの前に差し出したから驚きです。「二升はゆうに入る徳利は薩摩焼きです。昭和初期に千本松原の堤防で発見されました。当時、栓を抜くと薩摩焼酎の匂いがプンとしたそうですよ。誰が使ったものか分かりませんが、遠く異郷の地で、薩摩藩士は故郷をしのんだんでしょっかな」

酒好きの薩摩軍人が焼酎を飲み下しながらこぼした涙。そんな歴史的偉業を顕彰すべく海蔵寺では、毎年五月、薩摩義士追悼特別法要が行なわれ、薩摩義士の子孫やその関係者も参拝に訪れています。

## 近代建築の意匠の高さを物語る六華苑

海蔵寺が近世をしのぶ史跡なら、六華苑は近代桑名の繁栄を末代まで伝える文化遺産です。全国に先駆けて桑名に上水道を開いた諸戸清六の二代目当主が、イギリス人建築家ジョサイア・コンドルに依頼して建設した見事な豪邸は、意匠の素晴らしさもさることながら、当時の建築技術の高さを言わずもがなに物語っています。というもコンドルは鹿鳴館の建築家。四層の塔屋をもつ木造二階建て、ストライプの洋館はまさしく鹿鳴館の優雅さをそのままに、流麗なフォルムを際立たせています。もちろん、アール・ヌーヴォー風の椅子や机などの調度品はイギリスをはじめとしたヨーロッパ各国から輸入した名品ばかり。明治時代、米相場で

大成功を収めた二代目諸戸清六が贅を尽くして建設した豪邸は、和風建築やその前庭の池泉回遊式庭園も、ため息がこぼれるほどの素晴らしさ。ケタはずれの豪商はそのスケールも破格です。想像を絶するほどの巨額な費用は、一方で日本の技術者やデザイナーを育てていたのでしょう。ともあれ、古代から近代まで一貫して、日本を代表する港湾都市桑名の財力を物語る遺産は、諸戸家から桑名市に寄贈され、国の重要文化財に指定されています。

## 通り井と蛙の大名行列

江戸時代の桑名の「自慢」といえば、町屋御用水です。河口といつ低湿地にあるため、余りに水質が悪いのを憂慮して、松平足行が整備しました。通り井はこの水道の水を汲み上げていた所。井桁に組んだ井戸の周りでは、野菜を洗ったり、洗濯をしたりする女たちの井戸端会議が花を咲かせていたことでしょう。この通り井にまつわるエピソードを加藤さんが話してくれました。



通り井跡



# 長良川水系における水運の展開

齋藤道三や織田信長の城下町形成に大きな役割を果たした飛州の材木は、長良川水系を利用して運搬。これが記録に残された長良川水系の水運の始まりです。以降、江戸期を通じて河川水運は発展を遂げ、明治時代に入り、鉄道や道路に主役の座を引き渡すまで、物流の大動脈として重要な役割を果たしていました。

## 長良川水系の運材の始まり

岐阜県高鷲村の大日岳にその源を発する長良川は、日本を代表する長大な河川です。場所によっては、郡上川、河渡川、墨俣川と呼ばれていた時代もありました。

記録に残された長良川水系における水運の起源は、戦国時代です。天文年間一五三二―五五〇、齋藤道三は稲葉山（現在の金華山）に居を構えるに辺り、長良川流域に用材を求め、その運材に長良川水系を利用していたようです。

山上に要塞を構えた道三は、山の西麓に館を建て、広大な伊奈波神社を造営し、次第に城下町も整備していきました。城下町の建設には長良川水系の材木が大量に使用されたようで、その取引先は木曾谷にも及んでいたようです。

しかしこの城は織田信長が占領。永禄一〇年（一五六七）から一〇年ほど在城し、当時井ノ口と呼ばれていた町の名を岐阜に改名。戦乱によって焼土と化した城下町を見事に復興させています。その模様を宣教師のルイス・フロイスは、宮殿内の部屋・廊下・前廊・廁の数が多ければかりでなく、中略、その周囲にはきわめて上等な材木でできた珍しい前廊が走り、その厚板地はさん然と輝き、あたかも鏡のよ

うでありました」と記しています。

齋藤道三と同様に織田信長もこれらの膨大な材木を、おそらく長良川流域、飛騨・七宗、裏木曾の森林に求めたのでしょう。文献によればこの頃から流送材に対して課税が行なわれていたことがうかがえます。

長良川を下る材木には、流域内の郡上・武儀・山県三郡内の材木のほか、飛州材も含まれていました。

## 陸送を併用した運材ルート

慶長五年（一六〇〇）、高山城主金森長近は、関ヶ原の合戦における論功行賞として、武儀郡の領有と武儀郡上有知村（こつすぢ・現在の美濃市入）の築城が認められましたが、これは飛騨一円を支配する長近にとって大きな意味をもっていました。

飛騨国から美濃国に出るためには、上有知村に入って岐阜町に向かうルートが必要だったからです。つまり、飛騨国を領有する長近にとって上有知村は、軍事上の拠点であるとともに、飛騨国で生産される物資の重要な運搬拠点でもありました。

というわけで、武儀郡を領有した長近は高山を養子可重にゆだね、自らは上有知に新城を築き、居を移しました。これ以降、益田郡下原中綱場で陸揚された飛騨の白木・榎木類

主な船荷物 本舟約銀帳各半年分

順位	元禄4益後	正徳2益前	元文元益後	元文2益前	明治2益前
1	竹皮 172	酒 448	酒 243	酒 382	紙 34
2	酒 63	茶 383	竹皮 110	薪 104	米 3
3	炭 49	炭 197	薪 99	茶 98	椀皮 1
4	紙 40	木 168	炭 92	紙 69	人 1
5	木 39	人 98	板 42	板 50	
6	茶 28	紙 58	木地 37	人 38	
7	栗柿 21	米 39	紙 31	炭 33	
8	あえ 13	あえ 37	米 16	竹皮 23	
9	竹 13	竹皮 29	人 14	油 8	
10	小豆 12	酢 15	油 14	米 7	
その他	76	83	59	52	0
総数	526	1555	757	864	39

（\*岐阜市史（通史編近世）より）

は商人によって買い取られ、上有知へ大量に陸送されました。これらの材木は、川舟に積んで岐阜の中河原に流送されるようになりまし

た。長近により確立された運材ルートは、飛騨山 下原中綱 上有知 岐阜中河原 かし、慶長一五年（一六〇〇）二代城主金森長光の死去に伴い、上有知金森氏は断絶。その後、幕府領を経て元和元年（一六一五）には尾張藩領にと領主の変遷は見られましたが、近世中期の物流の大動脈として、ますます発展していきました。

ところが、延宝九年（一六八一）には、川下げ材が急減した下麻生筋・飛騨川水系の運材（と上有知ルートの村々との間に運材争議が発生。やがてそれも収まる）、この上有知ルートは岐阜・加納両町の発展に寄与したようです。

## 長良川役所と中河原湊

長良川を下る樺と、上流から下流に送られる舟荷・幕府や大名の御用舟を除く）を把握

し、そこから一定の役銀を徴収する役所が、長良川役所でした。その成立年代は不明ですが、尾張藩が元和五年（一六一九）幕府から美濃五万石を与えられた時、ともに授けられたと記録に残されていますから、長良川役所が江戸初期にはその機能を稼働させていたようです。

この長良川役所は、はじめ早田村の馬場にありましたが、長良川の流路の変動に伴い、寛永一三年（一六三六）には岐阜町の古屋敷に接する中河原の地に移り、明治になって長良川役所が廃止されるまで、その地で舟運管理を司っていました。

近世の絵図を見ると、長良川は現在の長良橋の辺りから、北は鷲山の辺りを通る川筋と南はほぼ現在の流路と、そして両者の間にもう一本の川筋と三に分かれ、鏡島・河渡付近で一つに合流していたことがわかります。現在の流路に近い南の川は、かつて井川と呼ばれ、近世初期には比較にならぬ程小さな川で、長良川の本流はもと北を流れていたようです。

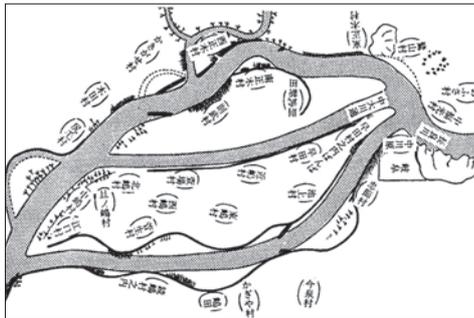
長良川役所が、当初早田村馬場にあつたというのも、そうした長良川の流路に対応して設けられたものでしょう。それが寛永期（一六二四―四四）に中河原に移転されたということは、岐阜町寄りの井川が以前に比べて大きな川になつてきたこと、井川も含めて三つの川筋が甲乙つけがたい水流となつて、早田村馬場では材木や舟の統制・把握が困難となり、三つの川筋が分流する直前の地に役所を置いた方が都合が良くなったためと考えられます。

このように中河原は、長良川の流通を把握するのに便利であつただけではなく、岐阜町も近いところから、岐阜町への入口（玄関）として近世を通じて徐々に発展していきました。

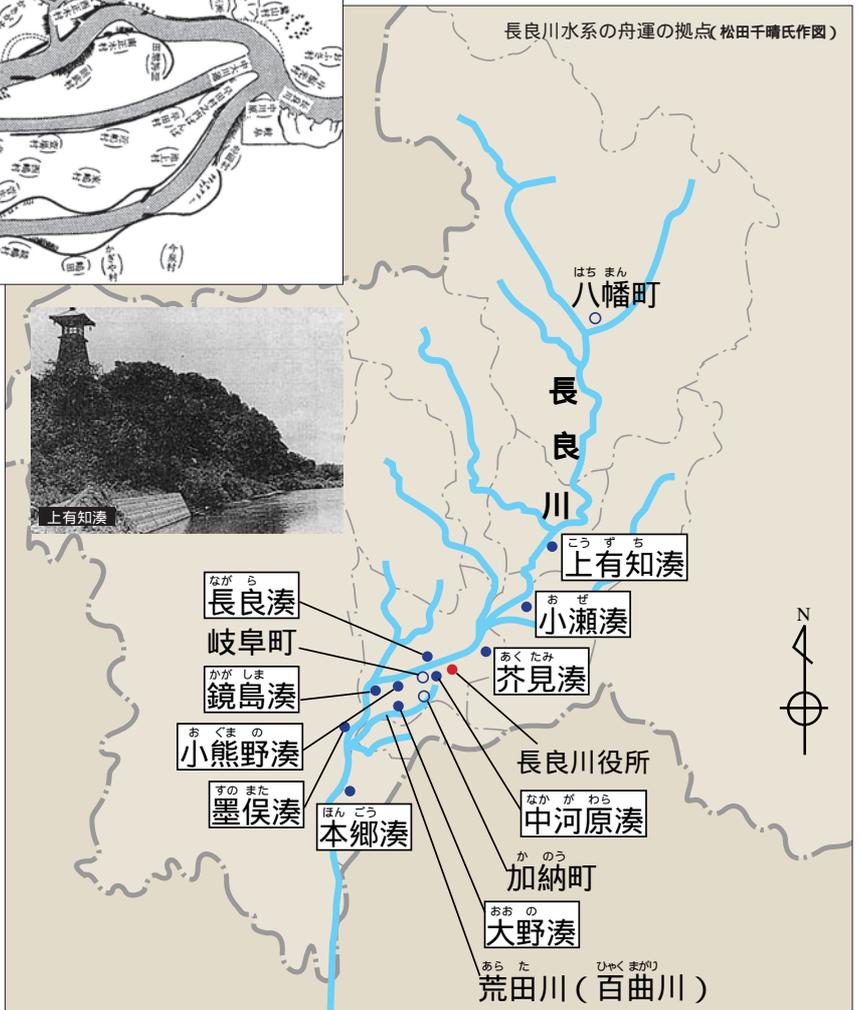
## 鏡島湊の変遷

長良川役所が長良川上流からの樺や舟荷を管理していたのに対し、伊勢湾方面や長良川下流から溯航してくる舟荷は、岐阜・加納方面やさらに長良川上流に搬送されようとする

近世の長良川の絵図(岐阜県歴史資料館蔵「川通絵図」より)



長良川水系の舟運の拠点(松田千晴氏作図)



揚しなければならぬ定めがありました。鏡島湊は長良川下流から遡上する荷舟の終点だったのです。

鏡島湊の成立は、天正二〇年(一五九二)、長良川水系で最も早く開かれた川湊の一つです。当時の岐阜城主織田秀信は、さまざまな人を定住させて鏡島湊を開くよう、馬淵与左衛門に申し付けています。また同年、鏡島を岐阜の外湊として発展させるため、鏡島湊以外の土地に舟を着けないよう命じるとともに鏡島湊に対しては年貢以外の諸役を免じてい

ものすべて(公用を除く)を必ず、鏡島湊で陸揚しなければならぬ定めがありました。鏡島湊は長良川下流から遡上する荷舟の終点だったのです。

長良川舟運の要衝として鏡島が選ばれた理由には、二つの自然条件を挙げることが出来ます。まず一点は、鏡島は周辺に比べて土地が高いため、洪水の被害を受けにくいこと。次の点は、鏡島より上流は長良川は三つの川に分流しており、しかも板屋川、伊自良川、戸羽川が流れ込んでいたため流れが複雑で、舟で遡上することが困難であったこと。こうして成立した鏡島湊で陸揚げされた物資は、長良川沿いの街道(湊街道あるいは京街道と呼ばれていた)を経て岐阜町まで馬の背で運搬されました。

その後鏡島湊は、加納藩、尾張藩の支配下に置かれるようになりますが、その特権はそ

ます。

この加納藩の政策に見られるように、河川交通の整備は貴重な収入源になるとともに、領国経営上重要な役割を果たしていました。そのため、領主は河川を水運が可能な状況に改修するとともに、水運を掌握するためのさまざまな支配機構を強化していましたが、前述した長良川役所も、尾張藩の流通統制を徹底させるための支配機構です。

こうした長良川水系の河川交通も、明治時代の鉄道や道路網の整備により、衰退していきま

の後も踏襲されていきました。しかし、鏡島湊の特権的な地位はやがて崩壊の兆しをみせます。その大きな原因は長良川流路の変化であり、慶安三年(一六五〇)の大洪水と川筋の普請などにより、鏡島より上流への周航が可能になったことです。しかも、享保年間(一七一六〜一七三六)には、鏡島湊は交通路の発達で時代後れの輸送体系になつてしまい、本来その機能に依存しているはずであった加納町からも排斥され、徐々に衰退していきま

た。この鏡島湊に代わり、物流を担うようになったのは大野湊です。長良川の支流、荒田川沿いに位置する大野湊は加納町へも程近く、以後加納藩の保護の下、物流の中心として栄えるようになります。

## 長良川舟運の衰退

### 参考文献

- 『岐阜市史』通史編近世(一)
- 一九八一年 岐阜市
- 『岐阜県林業史』中巻美濃国編
- 一九八五年 岐阜県
- 『長良川水系の河川水運』
- 二〇〇一年 松田千晴

## VOICE ALLEY

**VOICE 1** 後藤信英さん (津島市/教員)

三七号の座談会では、父、野呂界雄が大変、お世話になりました。

方言丸出しの話をまとめたいただきました。ところで、地球温暖化による海面上昇と輪中地帯の英知について、自分なりの問題意識を持っており、以下の二点について、今後、特集を組んでいただければ幸いと思っています。

①堤防の変遷について

②排水機の話

学校教育でも現在、総合的な学習の時間」の実践が多くなってきました。きょうと木曾川文庫を見学する児童・生徒が増えたことと思います。

**VOICE 2** 高橋伊佐夫さん (岐阜市/教員)

三七号の特集で明治改修を地元の人々がどう評価していたのか、その一面と、宝暦治水でなぜ油島千本松原堤を締切らずに喰違堰としたのかその理由がわかりました。毎回、大変役立ち、大切に保存し活用させていただいています。

**VOICE 3** 渡辺千蔵さん (大垣市/行政書士)

国土交通省発行の「木曾三川流域誌」には明治初期における木曾三川流域の渡船場として、数回列挙してありますが、渡船場の地名及び地図による図示がありません。明治・大正・昭和の時代、下流域の交通手段は渡船場であり、水が深くなつた時は、遠くまで橋を頼ったものです。ですからぜひ、木曾三川の「渡し場」「湊」「橋」についての特集を要望します。

### A

貴重なご意見ありがとうございました。今後の参考とさせていただきます。

お問い合わせは、KISSO編集 連絡先 FAX 0522571862

# 近代長良川水系における 中請積換湊となつた小熊野湊



松田 千晴 氏

1955年(昭和30年)岐阜市に生まれる。昭和53年、小学校教員となり以後、岐阜市歴史博物館、岐阜県教育委員会事務局図書館建設推進室、岐阜県博物館等を経て、現在は白川町黒川小学校勤務。『木曾三川流域誌』(建設省中部地建・平成4年)に執筆他。

## 一 中請積換湊

長良川に架かる忠節橋の下流・左岸に、かつて小熊野湊と呼ばれる川湊が存在し、「灰屋」と呼ばれる問屋が営業していた。

近代における長良川水系の流通を見ると舟運を媒介として流通していた物資はなん種類もあつたが、上流域以下上川筋というの新炭と下流域(以下下川筋という)の藁灰が、この小熊野湊を経由して各地に運搬されていた。そして、その物資の大部分を扱っていたのが、松尾家の経営する灰屋であつた。

## 二 小熊野湊の誕生

小熊野湊が誕生したのは、幕末のことであつたと伝えられている。

そのきっかけとなつたのは、松尾家の先祖がこの地に移り住んで問屋を始めたことによるが、同家には次のような伝承が残されている。

もともと松尾家は、方県郡木田村(現在の岐阜市木田)の



長良川左岸に今も残る小熊野湊(左側の堤防は近年築かれた)

枝村・柿ヶ瀬の庄屋であつた。開国によつて生糸が盛んに輸出されるようになると、松尾家の先祖は、周辺の農家が蚕を飼育して手引きにした生糸を、メリケン波止場(現在の横浜の港)に送るようになった。そして、その代金を受け取りに駕籠に乗ってメリケン波止場に行った帰り、松尾家の先祖は浜松に泊まつた。このとき、生糸の代金を目をつけた盗人が、先祖を殺して金を奪つてしまつた。そのため、松尾家は生糸の代金を周辺の農家に支払つてきた。その後、生計を立てるために小熊野湊を開いたといつのである。

## 三 上川筋からもたらされた物資

上川筋から灰屋にもたらされた物資というのは薪及び炭であり、船頭が一人乗り込んだ川舟(炭なら三〜四 俵を積んだ、以下小舟といつ)や馬車(炭なら四〜四五俵を積んだ)で運搬されてきた。

灰屋に物資を運搬してきた船頭といつのは、武儀郡美濃町(現在の美濃市美濃町)・同郡中有知村生樹(現在の美濃市生樹)・武儀郡中有知村志摩(現在の美濃市志摩)・武儀郡下有知村(現在の関市下有知)・山県郡千疋村(現在の関市千疋)・稲葉郡芥見村(現在の岐阜市芥見)の人が多い。なお、上川筋から薪及び炭を運搬してきた小舟は、帰りはなにも積まずに上つていった。小熊野湊より上流は瀬が多く、

流れも急であつたため、物資を積んで上るとが困難であつたといつ。

また、馬車で薪及び炭を運搬してきたのは郡上都をはじめ美濃町・中有知村・下有知村の人が多かつた。

小熊野湊に運搬されてきた薪及び炭は水位が高くなつても流される危険の少ない堤防の多少高い場所に揚げられた。そして、下流に向かう大型の川舟(以下大舟といつ)に積み替へた。薪及び炭には、オクリと呼ばれる書類が産地問屋から付けられていたため、灰屋はこのオクリに従つて運搬先別に物資をまとめ、大舟に積み込ませていたのである。

大口の場合には、一艘分の物資の全てを川筋にある一軒の消費地問屋に送るといふことになる。しかし、一艘に二五〜三 俵もの薪や炭を積み込むことができるだけに、一艘分の物資の送り先が二〜三軒の問屋になるといふこともしばしば発生した。このようなとき、灰屋は無駄のない道順で物資を降ろすことができると積み込ませていなければならなかつた。そのためには、灰屋自身が木曾三川下流域の地理を熟知している必要があつたといつ。

灰屋の業務内容は、郡上方面から運搬されてきた薪及び炭を上手に手配して、確実に名古屋に送ることであり、薪及び炭を灰屋自身が購入することはなかつた。堤防に薪や炭を置いておくとはつても、それはただ預かつていただけのこと、盗まれたり出水によつて流失したりすれば弁償しなくてはならなかつた。そのため、灰屋は、薪及び炭が夜のうちに盗まれない

## 四 物資を運搬した大舟の船頭

いふつ注意を払わなければならなかつた。



金華山と長良川・帆をあげて上る小舟を鑓秀殿(稲葉郡長良村)から望む(昭和10年前後の絵(八方牛))

下川筋に物資を運搬した船頭は、稲葉郡島村(現在の岐阜市島)・本巣郡合渡村(現在の岐阜市河渡)・稲葉郡鏡島村(現在の岐阜市鏡島)・木田村の人が多かつたが、中には美濃町の船頭も数人いたようである。

灰屋からは、下流に向かって毎日途切れることなく薪及び炭を積んだ大舟が出ていた。しかし、名古屋における薪及び炭の消費はそれ以上に大きかつたため、常に不足状態にあつたよつである。大舟の船頭が名古屋の堀川や新川に着くのを、消費地問屋は常に待ちかまえている状態であつた。

なお、薪及び炭を生産する美濃の山村から名古屋方面までは距離があり、しかも道路事情が悪かつたため、馬車による運搬は望むことができず、当時としては川舟(小舟及び大舟)が日常生活物資(燃料)の唯一の運搬手段であつた。

五 下川筋からもたらされた藁灰  
名古屋や桑名の消費地問屋に薪炭を運搬し

た大舟の船頭は、灰屋の指示に依って俵に詰められた藁灰一俵の重さは五・五・五貫目を四一五俵積んで小熊野湊まで上ってきた。木曾三川の下流域においては、日常の燃料として主に藁を用いていた。藁を燃やしたあとには灰が残る。この藁灰が田の肥料として売買されるというので、下流域には村ごと二軒三軒の藁灰問屋が見られたという。灰屋はこれらの問屋を日頃から自転車で回り、どの問屋に藁灰がなん俵あるのか、その内のなん俵を自分のとりに売ってもらえるのか、というのを常に把握していた。そして、その結果を記録し、下川筋に下る大舟の船頭に指示を出して、帰りに舟着場で受け取ってぎせるようにしていたのである。

藁灰は現金取引で購入しなければならなかったため、灰屋は藁灰の仕入れ代金一俵あたり三〜四銭を船頭に持たせるようになっていた。また、藁灰を運搬してきた船頭に対しては、灰屋が一俵につきいくらというように運搬賃を支払っていた。

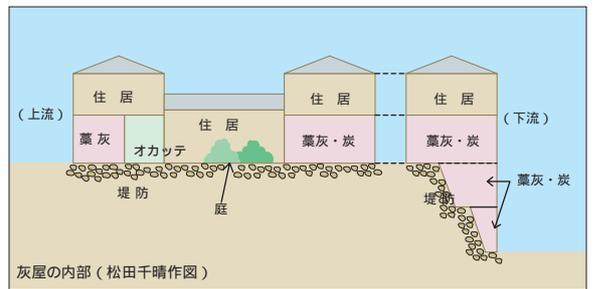
なお、灰屋が藁灰を仕入れていたのは、現在の三重県長島町周辺や愛知県海部郡周辺、岐阜県海津郡周辺という地域であった。

このようにして灰屋にもたらされた藁灰は、武儀郡中有知村（現在の美濃市中有知）、下有知村・加茂郡田原村迫間（現在の関市迫間）、稲葉郡蘇原村（現在の各務原市蘇原）、山県郡伊自良村（現在の山県郡伊自良村）、方県郡方県村（現在の岐阜市北西部等に馬車や荷車で運搬されていた。中有知村や下有知村方面へは、郡上方面から薪及び炭を運搬してきた馬車が、帰り荷として藁灰を運搬していたのである。

## 六 灰屋による藁灰の保管

下川筋から小熊野湊に大舟が到着すると堤防の上から川原に注意を払っていた神田親子が川原にかけ下りていき、大舟から藁灰をおろして、灰屋の倉庫に搬入していた。この親子は灰屋に直接雇われ、倉庫への藁灰搬入を専門に行っていたのである。

薪及び炭は多少雨に濡れてもたいては困らなかつたため、倉庫に搬入するようなどはほとんどなかった。しかし、藁灰の場合には雨に濡れると商品価値が失われるため、一旦倉庫に搬入しなければならなかつた。一度に多くの川舟が到着したようなときは、神田親子だけでは藁灰の搬入が間に合わないため、灰屋の主人夫婦も手伝う必要があつた。ちなみに、灰屋の倉庫には、藁灰が一万余余入つたという。



灰屋は、図版で示したように、長良川の堤防の傾斜に沿った縦に長い三棟の建物から成り立っていた。上流に位置する建物は、堤防の上の二つの階上の階は住居、下の階はオカッテと藁灰の倉庫と堤防の下の二つの階、藁灰の倉庫から構成されていた。中央に位置する建物は、堤防の上の二つの階、住居・前方は庭と堤防の下の二つの階、藁灰の倉庫から構成されていた。下流に位置する建物は、堤防の上の二つの階、住居・下は藁灰及び炭の倉庫と構成されていた。

## 七 船頭の労をねぎらいつ 灰屋のエバスコ

灰屋は、一年に一度（二月三日頃）、物資の運搬に携わる船頭（総勢五人余）や物資の搬入に携わる神田親子を、座敷に招いてもてなした。この日を、灰屋は「エバスコ」と呼んでいた。

灰屋は「エバスコの日」には魚仲（現在の岐阜市本郷町にあつた）から鯛のおかしら付き・ナマコ・スタコエ等を取り寄せ、自毛では串子の煮つけがし・コノマクの煮物・おひたし・魚のアラを使った吸物等を用意した。また、酒も花井屋（現在の岐阜市西野町で営業）から三斗樽単位で取り寄せた。料理の準備は、灰屋の女性を中心となり、魚仲の職人や船頭の妻たちも一緒に進んで行った。

船頭たちは、夕方になると灰屋に集まり、夜の二時頃まで飲んだり歌たりしていた。妻たちも、船頭夫たちの飲食が一段落してから食べたり飲んだりした。そして、夜になると川原において川舟（小舟及び大舟）の中で寝るのであつた。

この日の他にも、正月の年始にやってくる船頭に対して、灰屋は御年酒（焼酎）と酒と昼食を振舞つた。このときも「エバスコ」ではなかつたが、魚の切身「ナマコ」煮豆・「ポウウ」の酢のもの等、正月らしい料理でもてなした。エバスコと正月だけは、灰屋に出入りしている船頭が仕事を休んで集合したが、重労働に耐えて物資を運搬する船頭たちにとって、年に一度の大きな楽しみでもあつた。

## 八 小熊野湊にもたらされた 常滑の糶

当時、忠節橋の北側には、糶を専門に扱つたカメ六という問屋が営業していた。カメ六は、下川筋に薪及び炭を運搬する大舟の船頭に依頼して、常滑から糶（肥や水等を入れる）を運搬させていた。大舟によってもたらされた糶は、小熊野湊の堤防に置かれた。糶は雨に濡れても問題がなかつた。小熊野湊に糶があることを知っていた近所の人々は、糶が必要になると堤防で見ては購入していたという。

## 九 おわりに

小熊野湊には、灰屋以外の問屋が営業した

こともあつた。大正時代初期、対岸の島村で船頭をしていた人が、多くの川舟や馬車を使って物資を大きく動かす灰屋を見て、小熊野湊で問屋を始めたという。しかし、この人には上川筋や下川筋に問屋の知合いがなく、物資を搬入する倉庫もなかつた。しかも、小熊野湊に入ってくる船頭は、灰屋に物資をおろし続ける。これでは商売ができるはずもなく、間もなく問屋の経営をあきらめたのである。この人の他には、後にも先にも小熊野湊で問屋を始めようという人は出なかつた。

側から見ている船頭が問屋の経営を夢みるほど活況を呈していた小熊野湊ではあつたが、このような状況が見られたのも大正末期頃までのことであつた。

その後、昭和期に入ると道路事情が良くなることも、トラックが普及し始めたことにより、物資の運搬に自動車が使われるようになってきた。灰屋自身も、昭和十四年頃にはトラックを三台購入している。しかも、しだいに薪及び炭が燃料として用いられなくなり、灰屋の商売は先細りになっていったという。

これまで見てきたように、小熊野湊の灰屋は、陸上交通が発達していなかつた時代にあつて、長良川水系の舟運と馬車による部分的な運搬を結び付けた日常物資（燃料及び肥料）に関する流通機構の中核的役割を果していた。小熊野湊、灰屋が流通機構の中核的存在になり得た最大の要因は、扇状地の末端に位置したことによる水深の大きさにあつた。

小熊野湊から下流は大舟の上り下りが可能なだけの水深があり、上川筋から下ってきた小舟の物資を積み換える拠点となつてきた。つまり、小熊野湊の灰屋は、近代の長良川中流域における唯一の中請積換湊としての役割を担っていたのである。

本調査にあたっては故松尾三九氏（明治三九年生、松尾家に嫁いで灰屋の業務に携わっていた）に大変お世話になりました。ここに感謝の意を表させていただきます。

# 民話の小箱

## 平群池の不思議な伝説

桑名市

むかしむかしのお話です。

日本武尊が美濃国から鈴鹿郡へ赴く時、桑名の平群神社で休息をされました。

平群神社の裏山は、全山に椎の木が生い茂る神秘的なところ。あまりの美しさにみとれた日本武尊は裏山を歩き回っているとそれは美しい池を見つけた。

「少し疲れた。足でも洗っていい。」

と、冷たく澄みきった池に足をひたしてくつろがれたそうです。

この池には片目の魚が棲んでいて、

この魚を捕ると神罰があたるといわれていました。

いつものことが不明ですが、こんな話が残されています。

松右衛門とていつ漁師が内緒で、大なますを生け捕り、

背負い籠にいれ帰りかけたところ、

池の方から、「オーイ！松右衛門やーい！」

と呼ぶ声がしました。そしたら驚くことに、背中の籠から

「オーイ」となますが返事をしたではありませんか。

漁師は驚いてなますを池に放して帰りましたが、

その漁師は間もなく病気になるて死んだそうです。

この平群池では魚の放流が盛んに行なわれていました。

そのため、魚を求め多くの白サギが池に舞い降りていました。

ある日のこと、

九左衛門という獵師が、白サギを撃つとして

誤って池に落ちてしまいました。

このとき、すぶぬれになった九左衛門のふんどしに入っていたのが

たくさんのおもてい。懐の中にも、鯉が数匹入っていました。

おまけに木の株だと思つつかんだのが兎の足。

思わぬ収穫にうれしやう恐ろしやう。

九左衛門は以後感謝の気持ちを含めて、

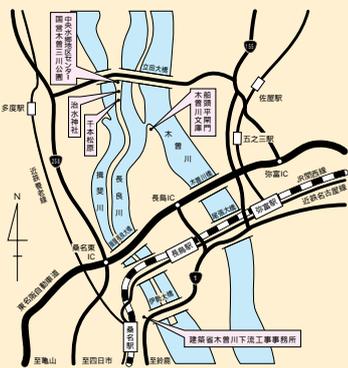
殺生を止し、白サギを大切にしたので、

白サギはその後、たくさん繁殖しました。

この平群池とその周辺は、平成一〇年に整備され、自然と調和のとれた公園となりました。



## 木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

海部郡立田村福原

TEL(0567)24-6233



## 編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

今号の編集にあたって、桑名市のみなさん及び松田千晴氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

4月5日、オランダ総領事館フレッド A. デ ブラウン氏が海津町の案内で木曾川文庫を視察。丁度桜の花もたけなわで、ブラウン氏が来園者と会話し写真に収まるシーンも。又、7月6日には俳優菅原文太氏が「菅原文太の長良川紀行」映画制作のため木曾川文庫を訪れました。次回は、美濃加茂市を特集します。

木曾川文庫ホームページ

<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真

上左:平田鞠貞と義士を祀る、海蔵寺

上右:伊勢両宮常夜燈(旧東海道沿い)下:揖斐・長良川遠景

『KISSO』Vol.39 平成13年7月発行

発行:国土交通省中部地方整備局木曾川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨字沢南81 TEL(0594)24-5715

木曾川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976